

# 児童養護施設職員の進路選択における進路観の変化

平松喜代江

## 1. 研究の背景と目的

社会的養護の多くを担っている児童養護施設（以下、施設）は乳幼児期から概ね高等学校卒業時期まで暮らすことができ、施設在籍年齢の制限撤廃方針が固まったものの高等学校卒業と同時に退所するが多い。中学校卒業後の進路として高等学校への進学率は施設在籍者（以下、在籍者）94.9%で全国中学校卒業生98.8%と大差はない（厚生労働省 2022）。一方、高等学校卒業後の進路として大学への進学率は在籍者33.1%で全国高等学校卒業生74.2%の半数に満たない（厚生労働省 2022）。国による高等教育の修学支援新制度の開始や児童養護施設の在籍年齢制限の撤廃により、大学進学の可能性が広がる一方で、在籍者の大学進学率が低い要因について、梅谷（2019:104）は、「進学に関しては、児童養護施設の子どもが大学等に進学することが、施設職員（以下、職員）の支援の選択肢に入っていないこと」を指摘した。同様に山口（2019）も、施設での養育に関する価値観は職員それぞれで様ではないとしたうえで、施設内の支援は施設の方針だけではなく、子どもと直接関わり合う職員の価値観の影響も大きいことを指摘した。このことは、職員が進学支援に関する考えや知識や技術をもちあわせなければ、子どもの選択肢は限られたものになり得る。これは、早川（2013）が示す施設間格差をなくし、支援の「公平性」と「個別性」を担保することの必要性とつながる。さらに、永野（2012:36）は、進学への意欲は「本人の素質や学力だけによっているのではなく、養育者の関わりによって、生じたり高めることができる」と指摘しており、長瀬（2008）も同様に養育者のもつ影響力の大きさを示した。これらのことから、在籍者の大学進学に関する施設間の意識差は、施設の方針に影響すると考えられるが、他方、在籍者と直接かかわる職員の大学進学に関する考え方も大きく影響すると考えられた。

以上から本研究では、職員を対象とした面接調査によって、進学支援の実態を把握し職員の進学に対する価値観の変化について明らかにすることを目的とする。

なお、本研究で使用する「進路観」とは、職員が在籍者へ進路指導をする際、職員が思い描いている在籍者の進路や、進路選択時に重要視する要件などを指し示す用語とした。あわせて、本論文で示す高等教育機関については、厚生労働省（2022）「社会的養育の推進に向けて」における「進学、就職の状況」の「大学」分類を参考とし「大学および短期大学、高等専門学校第4学年」を含んで「大学」と示すこととする。

## 2. 研究の方法

面接調査は、「大学助成制度説明会」に参加し後日面接調査に協力の意思を得られた5名を調査協力者とした。協力者の内訳は、A県内の児童養護施設2か所2名と自立援助ホーム1か所1名、B県内の児童養護施設2か所2名が調査協力者となった。調査協力者の基本情報を表1に示した。

調査時期は、2016年9月から2017年8月までに実施した。面接調査の内容は、「施設の子どもたちの様子」「進路支援について」「生活支援について」「施設の進路に関する方針について」「在籍者の進路に対する職員の心情」について自由に話してもらった。

調査手順について、面接調査は半構造化質問の形式をとり約1時間行った。面接は調査協力者の了承を得てICレコーダーに録音した。そして、録音された5名の協力者の録音記録は再生して逐語録を作成した。作成された逐語録から「施設の子どもたちの様子」「進路支援」「生活支援」「施設の進路に関する方針」「職員の心情」の5つに区分して総括表を作成した（本論文においては文字数の制限上総括表は割愛する）。倫理的配慮については、日本学術振興会が示す研究倫理規程を厳守して実施した。面接調査を行うにあたり、調査協力者に本研究の目的や倫理的配慮を記載した書面を配布し口頭にて説明し、同意書の提出をもって同意を得たこととした。

表1 基本情報

ID	性別	所属	資格
S01	女性	児童養護施設	児童指導員
S02	女性	児童養護施設	児童指導員
S03	男性	自立援助ホーム	社会福祉士
S04	女性	児童養護施設	保育士
S05	女性	児童養護施設	児童指導員

## 3. 結果

「職員の進路に対する価値観」を捉えるため、総括表を基に「進路観」に関する語りには一重線、「施設の進路に関する現状」に関する語りには二重線、「具体的な支援」に関する語りには波線、「進路支援に対する職員の準備」に関する語りには点線にて分類し、該当の語りのみを表2に示した。

表2 職員の進路に対する価値観

ID	施設の児童たちの様子
S01	・ <u>高等学校を卒業したらすぐに働きたい</u> 、早くお金を稼ぎたい児童が多かった。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>早く施設を退所したい子が多かった。</u></li> <li>・ 当時は、規則も厳しく、児童同士の上下関係もあるから、<u>早く退所して早く独立したい</u>という児童はたくさんいた。</li> <li>・ 落ち着かない生活の中で児童が過ごすため、<u>とにかく退所したい</u>気持ちになってしまう。</li> <li>・ <u>高等学校進学が多くなった。</u></li> <li>・ <u>特別支援学校の子が増えてきている。</u></li> </ul>
S02	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>普通高校と、特別支援学校高等部が施設の近隣にできたので、今は中卒で働くということはなくなった。</u></li> <li>・ <u>中学生になり自分の進路を考えた時に、先輩がみんな高等学校に進学していたら、自分も進学しようと思うみたい。</u></li> <li>・ <u>先輩で中退が続けば、中退ができると思って、中退することが増える。</u></li> <li>・ <u>施設の中で先輩の様子を見て、先輩の失敗した姿を見て、あれではいけないから、自分はどうしようといつも考えていた子もいる。</u></li> </ul>
S03	該当なし
S04	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>施設を退所すると縛られた生活から抜け出したような感覚の子どもが多いようで、就職しても辞めてしまう子もいる。</u></li> <li>・ <u>高卒だと資格も無いので不安だから、手に職をつけたい、資格取得を意識する子もいる。</u></li> <li>・ <u>職員の姿をみて、「私はこういう仕事は絶対無理だ」という子もいる。</u></li> <li>・ <u>投げやりな子は投げやりに進路を選ぶし、慎重なタイプは慎重に選ぶ。</u></li> <li>・ <u>先輩の姿を見て、そこから発信される情報を選択肢としている。</u></li> <li>・ <u>人とのつながりで進路選択の幅が広がっていくことは多い。</u></li> <li>・ <u>早く施設を退所して、自由な生活をして、髪の毛も染めて、ピアスもあけて、そっちに夢や期待を抱いている子が多い。</u></li> </ul>
S05	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>楽しい高校生活を送りたいとか、とりあえず高校へ行きたいという進学理由が多い。</u></li> <li>・ <u>先輩の悪いお手本の方が影響力はある。</u></li> <li>・ <u>昔は施設外でわんぱくなことをして職員が悩んだのが、今は学校に行かなくてとかひきこもって職員が困っている。支援に行き詰まりを感じるという気がする。</u></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>なりたい職業がある子は、大学や専門学校に行かないと資格が取れないとか、免許が取れないという場合は、学びたいと思っている。</u></li> <li>・ <u>皆と同じことがしたいとか、社会に出るまでにもう少し期間がほしいという理由で進学を考える子もいる。とりあえず、奨学金をもらえるから進学する子もいる。</u></li> <li>・ <u>就職した子も進学した子も孤独と不安とで続かなくなる、なかなか人間関係が上手く作れなかったり、ストレスを解消しきれずに行けなくなる。</u></li> <li>・ <u>大学の入試は、推薦枠や特別枠で受験するので、その後学力が伴わない。</u></li> </ul>
ID	進路支援
S01	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>平成2年頃は、中学校卒業後の進路は、専門学校への進学か、私立高校という学力のレベルだった。</u></li> <li>・ <u>大学進学は夢の夢であった。</u></li> <li>・ <u>進路に関する研修は、自己研修のような形で参加する。</u></li> <li>・ <u>いろいろな研修はあるが、自分が担当している子のことで悩んでいる。そのマッチした内容の研修は無い。</u></li> <li>・ <u>自己のお金で研修には行く。</u></li> <li>・ <u>具体的な対策があるわけではなく、みんな手探りでやっている。</u></li> <li>・ <u>自然と会話のなかで、高校卒業や退所、高校進学という話が出てくるので、そういうときに、就職の話やお金の話に発展していく。</u></li> <li>・ <u>具体的な職業の話がでたら、看護師や警察官になるために必要な資格や進路の話につなげていく。</u></li> <li>・ <u>意図的に話すよりは、話の展開で自然と話す感じ。</u></li> <li>・ <u>児童の好きなことの知識をつけられるように、中学校卒業後に専門的な学校への進学を勧めた。</u></li> <li>・ <u>高等学校に入学後、そこを卒業後にさらに知識を深めることができる付属の学校があることがわかり、本人の強い希望により目指すこととなった。その際、学費の準備としてアルバイトもしたいと話が進んでいった。</u></li> <li>・ <u>学力が低ければ低いなりの高校はあるが、落ち着かない子どもが施設内にいると、周りの子が巻き込まれて行くので、そういう子は就職して社会で1回勉強してもらうこともある。</u></li> <li>・ <u>祖父母の助言と経済的な支援によって大学に進学した子はいる。</u></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>親の遺産が偶然にもあり、当面の学費にあてられたため大学へ進学した。</u></li> <li>・ <u>親の援助やアルバイトでは足りない学費については、奨学金を利用するしかなく、文章力が必要である。</u></li> <li>・ <u>奨学金利用には文章力だけではなく、生い立ちの整理も必要になる。</u></li> <li>・ <u>進路選択等の気持ちが揺れ動く時期には適さないが、生い立ちの整理をやらざるを得ない。</u></li> <li>・ <u>高等学校の選択の時点で、将来の仕事に結びつけて考えている。</u></li> </ul>
S02	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>専門学校に一人進学する。</u></li> <li>・ <u>普通科に行っている高校生3人とも、進学を希望している。</u></li> <li>・ <u>今までは、保護者や親族が経済的にも精神的にも支援できる場合に進学している。そういう安心感がないと難しい。</u></li> <li>・ <u>職員はロールモデルになると思うが、職員は職員のように、児童にとってのロールモデルはやはり一緒に暮らしている先輩のようである。</u></li> <li>・ <u>給付型の奨学金なら進学を勧める。</u></li> <li>・ <u>貸付型の奨学金の場合は、返済を自分でしなければならないので、そこはしっかりと話す。</u></li> </ul>
S03	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>夕食後に何気なく進路の話をしてみたり、1対1になれる機会があったときに聞いてみたり、じっくり話を聞きたいときは職員の部屋でゆっくり話したりする。</u></li> <li>・ <u>何かしらやりたいと思っていることがある子がほとんどである。</u></li> <li>・ <u>自分のやりたいことが曖昧でぼんやりしていて、逆にそれを見つけてすことに大変さを感じている。</u></li> <li>・ <u>調理師と関わりながら、包丁の使い方から味付けの仕方、調理の段取りみたいなものを教えてもらって、少し体験させてもらいその時に褒められて嬉しかったから、調理師を目指す児童もいる。</u></li> <li>・ <u>思いつきの子であれば、いろいろな選択肢の中から吟味して話をし、自分でも間違いないと思えているときは応援する時と思っている。</u></li> <li>・ <u>施設在籍者の特徴には、自信のなさや自己肯定感のなさがあると思う。</u></li> <li>・ <u>小さなところから褒めて、具体的な職業につながらなくても、それに行き着くためのギャップは埋めていきたい。</u></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>家庭であれば、両親がいて、兄弟が働いていたりすると3つのモデルをみることができる。</u></li> <li>・<u>いろいろな職業観に触れられる機会があると良いと思う。</u></li> <li>・<u>子どもたちは、潜在的には勉強をしたい気持ちがあると思う。</u></li> <li>・<u>勉強をやりたいかやりたくないかって言われたらやりたくないけど、やらなければいけないことは、潜在的にモヤモヤともっていると思う。潜在的に何とかしたいとみんな心に持っていると思う。</u></li> <li>・<u>整備士になりたい、整備士なるためには高校で工業科に入る必要がある。高等学校で3級の資格を取ると良いことをアドバイスしてもらい、勉強はやらなければならないと理解できる。</u></li> <li>・<u>一生懸命勉強する気持ちがあるなら一緒に勉強することを伝えると、そこから英語の単語を全部終わらせてきた。</u></li> <li>・<u>関わってくれる人がいるというのも、勉強のモチベーションなのかなと思った。</u></li> <li>・<u>この人がいてくれた、見てくれた、自分が出来るまでやると言ってくれたというのは勉強に取り組むきっかけになると思った。関わる大人の存在が大きい。</u></li> <li>・<u>もう一度高校に行きたい、卒業したいという子は、そのためには入試に受かるための勉強が必要だという話をして、本人なりに心に落ちているのか、すんなりと取り組んでいた。現実との折り合いを付け始めてきているのかなと思った。</u></li> <li>・<u>お金持ちになるには、中学卒業より高校卒業の方給料がいいと考えて、勉強する子もいる。</u></li> <li>・<u>調理師なるために高校に行きたいし、高校で友達も作りたいたいと思っている。</u></li> <li>・<u>給付型奨学金を得て進学させたいが、貸与型も使わざるを得なくなったときには、自分で借金を背負うことになるので、やり遂げるだけの信念があるのかをしっかりと話す。</u></li> <li>・<u>身近に信頼できる人や、相談できる人がいるかとても大事な気がする。</u></li> </ul>
S04	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>奨学金を借りないと進学できない子が多いので、進学させても大丈夫かどうかはしっかりと考えて支援する。</u></li> <li>・<u>進学に対して強い気持ちをもっていない子へは、1回就職してある程度お金を稼いで進学する道もあることを提示する。</u></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>進学に対する気持ちの熱量で、就職を提示しても進学したい、もっと安い学費の学校があると言っても、この学校に行きたいという強い意志がある子は、そのためにはバイトも頑張るし、奨学金の書類もいっぱい書くと</u>言え、行動できるタイプの子であれば、支援していく。</li> <li>・<u>最初は進学希望だったが、学費の工面が難しいことと、専門学校を卒業したあとに就職先があるのかということ</u>を考えて、就職に切り替えた。まずは就職をしてお金を貯めていくことになった。</li> <li>・<u>本人が落ち着いて話せるタイミングを見計らって進路の話をする。</u></li> <li>・<u>自分が話したいタイミングであっても、子どもが今は無理だということもある</u>ので、表情を見ながら、様子を見て話をする。</li> <li>・<u>卒園した子がロールモデルにいい面でも悪い面も影響は強い。</u></li> <li>・<u>なるべく家庭へもつなげたいので、進路希望を伝えることもする。</u></li> <li>・<u>奨学金に関する情報収集も含めて書類を書く方も大変だが、常にアンテナを張って情報収集しなければならない。</u></li> </ul>
S05	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>高等学校を選択する時点で、就職を希望するか、進学を希望するかというところを本人の希望を聞きながら考える。</u></li> <li>・<u>そもそも学力が高くない子が多いので、選べる学校も少ない。</u></li> <li>・<u>部活を一生懸命やりたい子は、部活をやってアルバイトをやって勉強もして</u>というのはなかなかハードルが高いので、部活を一生懸命やりたいのであればアルバイトをする時間がないので、就職したらどうかという話はする。</li> <li>・<u>アルバイトばかりを勧めるのも少し心苦しいので、とにかくもらえる奨学金を得られるチャンスがあるものは、挑戦するという指導をしている。</u></li> <li>・<u>奨学金に関する情報はアンテナを張って活用できるものは活用する。</u></li> </ul>
ID	生活支援
S01	該当なし
S02	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>退所する前に金銭管理に関するセミナーとかに何度も行く。</u></li> <li>・<u>毎月の予算を立てて、それを月末に収支報告して、次のお小遣いをも</u>らう方法を実践している施設がある。</li> </ul>
S03	該当なし
S04	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>進路が決まってからは、自活の練習を始める。</u></li> <li>・<u>1人で1週間ぐらい、予算をたてて自活の練習をする。</u></li> </ul>
S05	該当なし

ID	施設の進路に関する方針
S01	・ <u>大学に進学するための進路委員会のような組織を再度設けた。</u>
S02	該当なし
S03	該当なし
S04	該当なし
S05	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>施設長が大学進学を強く推している施設は、やはり職員も児童も進学を選ぶ率が高いかなと思う。</u></li> <li>・ <u>できるだけ早い時期に経済的に自立できるように、高校卒業後就職を目指す施設長の考えもある。</u></li> <li>・ <u>就職を大事に考えている施設は、職業高校の進学を勧めるという気がする。</u></li> </ul>
ID	職員の心情
S01	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>悩みばかりで、サークルみたいな感じで、どうしたらいいのだろうと話し合っていた。</u></li> <li>・ <u>施設として進路支援のマニュアルがあると良いと思う。</u></li> <li>・ <u>子どもたちの勉強は、勉強する以前の段階で、まず人を信用するところからはじまる。信用できないので、なぜ信用できないのかを考えると自分の生き立ちと向き合わざるを得ず、それが辛くて、そこからすすめないのかと思う。</u></li> <li>・ <u>子どもたちは、自分の思いを受け止めてくれる大人が後ろに支えてくれるだけで頑張れる、乗り越えられるように思う。</u></li> <li>・ <u>子どもの気持ちを受け止めるのは大変困難であり、子どもの気持ちを受け止めた職員を支えてくれる職員の組織的な体制が必要と思う。それがないと職員も辛い。</u></li> <li>・ <u>悩んでいる時に同僚に話を聞いてもらったり、アドバイスをもらったりできるのはとても心強いと思う。</u></li> <li>・ <u>就職してもいろいろな支援が必要な子が増えているから、専門的な知識がないと間違った方法で対応してしまうという不安がある。</u></li> <li>・ <u>施設として組織的に専門的な対応を勉強できる機会や助言をもらえることは少なく、それぞれ各自で勉強することが多かった。</u></li> <li>・ <u>自分から行く研修では助言と勇気を貰って帰って来る。</u></li> <li>・ <u>進路選択する場合に、ある程度学力がある子へは、就職後の給料面や待遇面も違うので、大学卒業の資格は持っていた方がいいと勧めている。</u></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資格を持っていると強みだと思う。</li> </ul>
S02	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔は、学力がないなら、無理して高等学校に行くことはないと思っていた。勉強をしたい子だけが行くと思っていた。でも中卒で就職をしてもやっぱり力が弱いので、施設にいられるのなら、できるだけここにおいて社会に出るのがいいというふうに自分の考えも変わってきた。</li> <li>・大学へ入ることはできても続けられるか心配である。</li> <li>・児童養護施設で生活をしているからということに限らず、一般家庭の子も、高校3年生の時に明確に目標持っているかということ、そういう子達ばかりではないので、社会全体の問題というか、課題でもあると思う。</li> <li>・大学に進学したロールモデルがないので、希望すらないと思う。</li> </ul>
S03	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人が思っている進路の希望にできるだけ沿えることが大切だと思う。</li> <li>・本人が潜在的に持っている希望を引き出すことが大事である。</li> <li>・自分には無理かもしれないと思っているのであれば、それを解きほぐしながら、叶えられるようにしたい。</li> <li>・子どもがもっている夢へと近づけていくことが役割と思う。</li> </ul>
S04	該当なし
S05	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学入学も比較的簡単にできるようになったから、いかに続けさせるかとか、いかに卒業まで持っていくかという支援を求められるようになっていく。</li> <li>・大学に入るためには親切的な推薦制度とかがあるが、続けるためにはあまり親切ではなく、そこから努力するというのはなかなか難しい。</li> </ul>

### (1) 職員の進路に対する価値観

進路先については、「大学進学は夢の夢であった」(S01)、「社会に出て一度働いてから」(S01)「1回就職してお金を貯めてから進学する」(S04)、「就職を希望しているのに、進学を勧めることはあまりない」(S05)と語られた。大学進学 of 優先順位は低く、まずは経済面の準備を優先していることがわかる。

進路に関するロールモデルについては、「一緒に暮らしている先輩がロールモデル」「職員はここで働いているけど、一緒に過ごしてくれる大人であって、働く人を見ることがない」「調理員や業者などを見て憧れるかと言ったらそうでもない」

(S02)、「職員は、働いている人でお給料もらっている人、それが1つ職業としてのモデルとなる」「家庭であれば、両親や兄弟など3つのモデルがある」「いろいろな職

業観を知る機会があるといい」「どれだけ身近に信頼できる人や、相談できる人がいるかが大事」(S03)と語られた。在籍者にとっての進路のロールモデルは、職員ではなく施設在籍の先輩と考えている。さらに、様々な職業観に触れる機会に乏しいためそれらの機会を設ける必要性を感じていることがわかる。

経済面の準備については、「奨学金を借りないと進学できない場合、進学させても大丈夫か」(S04)、「稼げ稼げというのも少し心苦しい」(S05)と語られた。職員として在籍者にアルバイトを強く勧めることへの抵抗感や葛藤があることがわかる。

進学への意欲については、「やりたいと思っていることがある」「自分のやりたいことが曖昧で、それを見つけ出すことに大変さを感じている」「自信のなさや自己肯定感の低さ」「小さなところから褒める」「潜在的には勉強をしたい」「潜在的に何とかしたいとみんな心に思っている」「勉強を見てもらえた、自分を見てもらえた、褒めてもらえたことなどが心地良かった」「関わってくれる人がいることが勉強のモチベーションになる」「この人がいてくれた、見てくれた、自分ができるまで一緒に勉強をしてくれると言ってくれたことは勉強に取り組むきっかけになる。関わる大人の存在が大きい。」(S03)、「進学に対する気持ちの熱量が大きい者は、バイトも頑張るし、奨学金の書類もしっかり準備できる」(S04)と語られた。在籍者たちは、目標をみつけるまでに時間はかかるものの、何らかの夢を秘めている場合が多く、それを引き出す役割が職員であると捉えている。

## (2)施設の進路に関する現状

「学力がそれほど高くない在籍者が多いため、選べる学校も少ない」(S05)と語られた。高等学校への進学率は全国中学校卒業生 98.8%に対して、児童養護施設在籍者 94.9% (厚生労働省 2022) であり、高くなってはいるものの学力レベルでみると低学力の者は高等学校の選択肢が少ないことがわかる。

在籍者の進路先については、「中学校卒業後の進路は、専門学校への進学か、私立高校という学力のレベルだった」(S01)と語られた。さらに、高等学校進学率が高まったことにより、高等学校進学者の学力レベルの幅が広がってことがわかる。一方、大学進学率は全国高等学校卒業生 74.2%であるのに対して、施設在籍者 33.1% (厚生労働省 2022) と決して高くないことから、一定の学力レベルの者が希望していると考えられた。

進路を定めるためのロールモデルは、「中高生が進路のお手本になっている」(S01)、「卒園した者がロールモデルになっており、いい面でも悪い面も影響は強い」(S04)と語られた。さらに「調理師に料理を教えてもらって、褒められて嬉しかった経験から調理師を目指す」「母親に料理を作っておいしいと言われたことがうれしくて、調

理師を目指した」(S03)ことが語られ、体験を通して承認欲求が満たされたことからその職業を目指した事例があることがわかった。

進路に向けての経済面の準備について、(S01)(S02)の施設では、「祖父母の助言と経済的な支援」「親の遺産」「保護者や親族が経済的にも精神的にも支援できる」と経済的な準備が整っている場合大学進学をしていることがわかった。「そういう(経済的な)安心感がないと難しい」と語られており、大学進学への進路観が現れている。(S04)の施設は、「自分のお金と奨学金で学費を準備するしかないということを理解している場合、そこに向かって前向きにやってくれる者が多い」と語られ、進路にむけての準備についての話し合いが行われていたことがわかる。また、(S05)の施設では、「部活を一生懸命にやりたいのであればアルバイトをする時間がないので、就職をしてはどうかという話はする」と語られ、経済的な問題から進路の選択肢が限られたことが示唆された。この経済面の準備において、施設ごとの進路支援観の特徴が現れた。

### (3)具体的な進路支援

学力に関する具体的な支援は、「高校受験のための塾の費用については補助されるが、大学受験についてはボランティアの学習支援を活用する」(S05)と語られた。高等学校への進学支援と大学への進学支援に関わる費用について、施設としての支援方針に相違がみられた。

経済面の準備に関する支援について、(S02)(S03)の施設ではともに「給付型の奨学金なら進学を勧める」「給付型奨学金を得て進学させたい」と語られた。一方、「貸与型の奨学金の場合はしっかりと話す」と語られ、ともに給付型の奨学金と貸与型の奨学金に関する職員の考え方に共通点がみられた。

相談支援についての語りは多く見られた。「具体的な対策があるわけではなく、みんな手探りでやっている」(S01)と語られた。さらに「自然と会話のなかで、具体的な職業の話がでたら進路の話につなげていく。意図的に話すよりは自然と話すことを心掛けている」(S01)、「何気なく進路の話をしてみたり、機会をみて進路について聞いてみたり、じっくり話を聞きたいときは別室でゆっくり話をしたりする」(S03)、「本人が落ち着いて話せるタイミングを見計らって進路の話をする」「(子どもの)表情を見ながら機会をみて話をする」と複数の施設で自然に話せるタイミングを見計らって進路の話をしていることがわかった。そして、進路支援のマニュアルはなく、職員の力量に任されていることがわかった。

### (4)進路支援に対する職員側の準備

進路に関する研修について、「自己研修のような形で参加する」「支援について悩むことはあるが、それに合った内容の研修は無い」(S01)と語られ、自己負担にて参加している一方で、職員の学びたい要望に合う研修が少ない現状があることが示唆された。

「奨学金に関する情報収集は、常にアンテナを張って情報を収集している」(S04)(S05)と語られており、経済面の支援に関しては情報を待っているだけでは十分に得られないことが指摘された。情報収集の難しさが見受けられる。

#### 4. 考察

##### (1)職員別の進路に対する価値観の変化とその対応

(S01)は、「子どもたちは夢がなかった、未来が見えないようにも思えた。」「落ち着いて夢をもっていられる生活状況ではなかった」と当時の子どもや施設の様子から職員的心情が語られた。この語りから、希望進路を定めるためには「夢をもつこと」が必要であると考えられるが、在籍者は「夢」をもてる生活状況ではなかったことから、職員として現実との葛藤を抱えていると考えられた。これは、西本(2012)が夢をもてたとしてもそれは「行くことのできる大学」と「就くことのできる職業」が経済的な制約の中で決まると指摘している点と類似している。そして、進学についても、「最低ラインとして高校までは卒業して、その間は施設で生活できる」と語られており、進学することは学ばせることだけでなく施設での生活継続のための一つの手段でもあったことが考えられた。

また、「子どもたちの勉強は、勉強する以前の段階で、まず人を信用するところからはじまる」と職員は指摘しており、子どもたちが「なぜ人を信用できないのかを考えると自分の生き立ちと向き合わざるを得ず、それが辛くて、そこから進めないのかと思う」と語られた。これは勉強の段階に入る前に、人を信用する過程を通過する必要があると考えていることがわかる。これと同様に櫻谷(2014)は、自分史の再構築を含む包括的な支援の必要性を指摘しており、人を信用する過程として重要であることを指摘した。そして、「子どもたちは、自分の思いを受け止めてくれる大人が後ろに支えてくれるだけで頑張れる、乗り越えられる」と職員は語っており、その子どもを支える大人に職員がなろうとしていることが伺える。

(S02)は、「昔は、学力がないなら、無理して高等学校に行くことはないと思っていた。勉強をしたい子だけが行くと思っていた。でも中卒で就職をしてもやっぱり力が弱いので、施設にいられるのなら、できるだけここにおいて社会に出る方法がいいという考えに自分も変わってきた」と語り、(S01)の「進学することは学ばせることよりも施設での生活継続のための一つの手段でもあった」と同様の進路に対する考えであると考えられた。これは、すでに永野ら(2014)が、18歳未満での退所は住居・

職業ともに不安定になる傾向があることを指摘しており、本研究においても再確認できた。

(S03) は、「大学には自分で自分を磨いていくような過程があると思う」「自分を磨ける大学時代を経験せずに社会に出ざるを得ない子が多いので、たくさんの子が大学に進学したいと思えるような取り組みがあるといいと思う」と大学進学を勧めたいという職員の思いが語られた。

(S05) は、「大学入学も比較的簡単にできるようになったから、いかに続けさせ卒業まで続けられるかという支援を求められるようになってきている」ことを指摘しており進路に関する価値観が変化してきていると考えられた。

これらの結果から職員は、在籍者の進路として義務教育終了後の上級校への進学について、以前は「無理して進学をすることはない」「勉強したい子だけが進学する」という限定的で特別な在籍者が該当すると考えていた。しかし、現在では、「就職することが難しく、職についても継続できない場合が増えた結果、就職しても仕事を続けられないのであれば、進学して施設での生活を継続した方が良い」という考えのもと、進学を進める支援に変化してきている。従来の進学するだけの経済面や学力面が不足しているから就職するのではなく、就職できない、仕事を継続できないから進学するという傾向が顕著になっている。これは、単に問題を先送りしているに過ぎず根本的な問題解決にはなっていないと考える。これは高等学校への進学率が上昇したことによって、社会に出る時期が先送りされ、上級校への進学問題も先送りされた状況であると考えられる。この問題は、在籍者だけの問題ではなく、広く日本の社会にも発生している問題であり、原家庭や生活基盤が脆弱な在籍者に特に顕著に表出しているにほかならない。このような問題を先送りする対応策ではなく、問題の根幹部分を変えていかなければ、在籍者の進学支援は出口の見えない状況は続くと考えられる。その方策の一つに、進路を考えられる状況になるような支援が必要である。原家庭に精神的にも頼ることのできない在籍者にもっとも必要な力は、「大人の支えがあること」である。例えば一步を踏み出す時に、見ていてくれる、見守っていてくれる大人がいることで安全基地を確保できる。戻ってくる場所があることは幼児期の愛着形成の過程と同様で、たとえ失敗しても安全基地に戻り情緒的補給を受けながら探索行動にできることのできるものである。この行動を繰り返すことによって、「人を信用する力」が身につくのである。このように愛着を形成することが、社会化の過程に対して重要な役割を果たし、愛着対象と自分についての内的ワーキングモデルが、安定した形で機能するようになる。そして、次に「生き立ちの整理ができる」力が必要となる。これは、在籍者の措置前の生活を考えると、本来安全基地となる原家庭にそのような機能がなく信頼できる大人もいないまま必死に生きてきた在籍者にとって振り返りたくない過去であることを想像するのは難しくない。それを可能にできるかどうか、職員に

求められる重要な支援であり力となる。このような在籍者にとって必要な力を身につける方策が現在は、職員個人の能力に依存している現状は否めない。このような現状では、職員は希望と現実の狭間から抜け出せず燃え尽きてしまう恐れがある。これでは、在籍者も職員も共倒れになってしまう。これを乗り越えた先に在籍者は夢をもつことが可能になるのである。

## (2)進路を支援する職員の苦悩とその対応

「子どもの気持ちを受け止めることは大変困難なことで、子どもの気持ちを受け止めた職員を支えてくれる職員の組織的な体制が必要であると思う。それがないと職員も辛い」(S01)と在籍者を支える大人をさらに支える人が必要であることが指摘された。この職員の苦悩について櫻谷(2014:141)は、「子ども時代のトラウマは大人になって、就労においても、就学においても、生活全般においても全く考慮・配慮はされない」ことを指摘している。目に見えない精神的・身体的に大きな負担を背負いながら社会のなかでなんとか生きていかなければならない在籍者を支援する重責を感じていることがわかる。

また、「悩んでいる時に同僚に話を聞いてもらったり、アドバイスをもらったりできるのはとても心強い」(S01)、「施設として組織的に専門的な対応を勉強できる機会や助言をもらえることは少なく、それぞれ自分で対応するという場合が多かった」

(S01)との語りから、在籍者への多様化した支援が求められるが、個人の努力のみでの対応に困難さを感じ、職員の気持ちを受け止め支えてくれる人が必要であることが示唆された。「悩みばかりで、サークルみたいな感じで話し合っていた」(S01)「施設として進路支援のマニュアルがあると良いと思う」(S01)との語りから、職員も悩みながら職員同士で支え合って在籍者を支援していることが示唆された。

職員の進路に対する価値観の変化をみるなかで、在籍者の進路の変化をとらえることができた。現在、日本の社会において義務教育終了後に就職する者は全中卒者のうちわずか0.2%であり、在籍者においても2.2%である(厚生労働省2022)ことから、義務教育終了後に就職することは、日本社会において選択肢から薄れつつあると捉えられる。この傾向は、在籍者も同様であり、経済面・学力面・対人面のあらゆる側面が脆弱な在籍者の進路を支援しなければならない職員の苦難は計り知れない。このような状況にある職員を燃え尽きさせないための対応策の検討が急務である。

対人面で課題の多い在籍者を支援する職員のメンタルヘルスをサポートする体制の整備が必要である。これは、職員のパーソナルな問題ではなく、だれに対しても職員すべてにサポートできる体制が必要である。職員の精神的な健康があってこそその在籍者への支援が生きるのである。それは、職員の語りにもあった対人援助におけるマニュアル化は難しいにしても、「悩みを話せる機会」「アドバイスを得られる機会」「同

僚で語れる機会や時間の確保」「リアルタイムな話題に関して勉強する機会」などを、個人や仲間内に任せるのではなく、施設として、国として構築していく必要があると考える。この点に関しては、職員のパーソナリティに任される部分が多く、対策として周縁化されている可能性が考えられる。

## 5. 結論と課題

職員の進路観は在籍者の変化に伴って、変化していることを捉えることができた。それは、在籍者の経済面・学力面・対人面の脆弱さから就職することが難しいケースの増加が要因のひとつであった。そのため、義務教育終了後に上級校へ進学させなければならなくなったことが考えられた。

このようなケースは、在籍者特有の問題ではなく、日本としての問題でもある。文部科学省（文部科学省 2021）は、小・中学校における不登校児童生徒数は 196,127 人で過去最多と報告しており、その傾向は学年が上がるほど増加傾向にあることを指摘している。この傾向は、脆弱な原家庭で育った在籍者に現れる確率はなお一層高くなる。このように義務教育機関において教育できなかったまたは教育を受けられなかった在籍者を上級校へ進学させる支援は並大抵のことではない。先行研究においても遠藤（1994）は「学校生活の期間の延長が社会的に保護される時間の延長でもある」と述べられており、「その間に子どもたちが身につけるべき力量、「生活力」「生活関係」を明確にし、その形成のための援助の道筋が検討されなければならない」と示しており、教育と福祉の関連の在り方からみた課題を呈している。

先述した通り、日本社会全体として、働く力が備わっていない者に対してただ単に上級校へ進学させることは問題の先送りであり、解決策にはならないことは明白である。近年は高等学校卒業後にさらに上級校へ進学するハードルがかなり低くなったことから、問題の先送りは高等教育機関にまで及んでいる。この問題は、在籍者や職員だけではなく、日本の国と福祉と教育機関が問題の根本を捉え直し、抜本的な対応が急務な課題であると考えられる。そして、この進路に関する価値観をみることによって、職員の支援に対する苦悩が浮き彫りになった。今後、在籍者の支援だけでなく、職員の支援体制を整備していくことが緊急の課題と考えられた。ただし、この指摘は、単に大学進学を否定することではなく、より一層大学での学びを意味あるものにするために必要であると考えられる。

## 参考文献

- 1) 遠藤由美（1994）「教育と福祉の谷間」『社会福祉と社会教育：教育福祉論/小川利夫』 亜紀書房,485.
- 2) 早川悟司（2013）「児童養護施設における自立支援の標準化：東京都「自立支援強

- 化事業」を通じて」『子どもと福祉』編集委員会編,6,8-15.
- 3) 厚生労働省 (2022)「社会的養育の推進に向けて」  
(<https://www.mhlw.go.jp/content/000833294.pdf>,2022.06.04 閲覧)
  - 4) 文部科学省(2021)「令和 2 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果の概要」文部科学省,2021 年 10 月.
  - 5) 永野咲(2012)「児童養護施設で生活する子どもの大学進学に関する研究－児童養護施設生活経験者へのインタビュー調査から－」『社会福祉学』52(4), 28-39: 34,36,37.
  - 6) 永野咲, 有村大士(2014)「社会的養護措置解除後の生活実態とデプリベーション－二次分析による仮説生成と一次データからの示唆－」『社会福祉学』 54(4),28-40 : 34,37.
  - 7) 長瀬正子(2008)「第 4 章児童養護施設経験者の大学支援等を支えたもの」『児童養護施設経験者に関する調査研究 2007 年度報告書』大坂人権教育啓発事業推進協議会,49-65.
  - 8) 梅谷聡子(2019)「子どもの自立を促す児童養護施設のインケアに関する考察：アフターケア相談員へのインタビュー調査から」『同志社大学社会学会』 131,95-121 : 104.
  - 9) 山口季音(2019)「児童養護施設の教育に関する一考察：施設職員へのインタビュー調査を通して」『関西大学教育科学セミナー』 50,43-52.
  - 10) 櫻谷真理子 (2014)「児童養護施設退所者へのアフターケアに関する研究－社会的自立を支えるための施設職員の役割を中心に－」『立命館産業社会論集』 49(4),139-149 : 141.